

サークル

せがみい



怪人退治業者

マホ

～強烈な悪臭責めの連続
精液風呂で極太触手に犯されて～

怪人が出現したという情報を聞き
怪人退治業者の一人であるマナは
とある田舎町にやってきた。
村は濃い霧と悪臭に包まれていた。

担当地区ということもあり
わずか数日の滞在でマナは怪人の隠れ家
である洞窟を突き止めることに成功する。



洞窟へは、あっさり侵入することができたが
実はこれ、怪人に仕組まれた罠だったのだ。
マナは洞窟に入ってから、間もなく
怪人の触手に拘束されてしまう。



「マナちゃん、ひさしぶりだね！
ずっと会いたかったよ！」

「この声……？あ！」

この前、私を取り逃がした怪人!？」

「おお！覚えててくれてうれしいな！」

実は、この地区をマナちゃんが担当

しているって知ってずっと大暴れ

してたんだ！予想どおりマナちゃんが

ここにきてくれたんでアジトを

分かりやすくオープンにして待ってたんだよ」

「畏だっ たっ ていうの……？」

ぎゅ
ぎゅ



手首の締め付けがきつくなる
痛みでマナの顔がひきつる。

「泣いてるマナちゃんかわいいなあ！」

「痛い！離して！この！」

マナは抵抗を試みるが肩から
手首までぴくりとも動かすことができない。

ギキキキ
ギキキキ

「じゃあ、そんなマナちゃんに
僕からのプレゼント！
こんな大サービスするの
マナちゃんだけだからね」

マナの近くにいた触手から
強烈な悪臭が放たれた。

「え!? うう! 何!?
くさ! うえっ! やだあ!!」

油断していたマナは悪臭ガスを数秒だけだが
思いつきり吸ってしまった。すぐに口をふさぎ
息を止めるが既に遅かった。

おやん



(やだやだやだ!!早く終わって!早く終わってえ...臭いのいやああ)

「だめだよ!マナちゃん、せっかくのプレゼントなんだから!ちゃんと受け取ってよ!」

ズズ
ドド
ドド

ぎゅん
ぎゅん
ぎゅん

マナの意味とは裏腹に触手から放たれる悪臭は止まる様子がない。息を止めて耐えているがそれでも鼻から少しずつ侵入してくる。

「マナちゃん!ごめんね...
もうタンクが切れちゃったみたい。また溜まったらプレゼントするね!」

「.....」

「あれ?マナちゃん?」

マナは立っただまま気絶してしまっただ!
「すごいすごい!
立っただまま気絶してる!
さすがマナちゃん!目が覚めたらもっとおもしろいことしようね!」



「……んうん……んんん?
……どいどい?」

「マナちゃん! やつと目が覚めたね
あれから一時間くらい寝てたよ?」

(え?)

マナは数秒の後、今の状況を思いだした。

「暇だったから、ずっとマナちゃんの乳首
くりくりしてたよお」

「このヘンタイおやじ!!
ゆるさない……」

「でも、やっぱり悶えている
マナちゃんが僕は一番好きかな」

「えっ？やだ！もうひどいことしないで！
おねがい……」

マナの首に巻き付いていた触手に
少しづつ力が込められていく

ビョウ
ビョウ

「ああがつ!!うううううう
ぐるじいじい……」

ぎゃう
ぎゃう

マナの上にした触手の
動きが怪しい。
だがマナはそれに気づく
余裕などなかった。

ドクン

「何?この音...?上!?!」

気づいたところでどうにもならない。
触手の精液が抵抗のできないマナに
降り注ぐ。

どひゅ

どゅ

「これもマナちゃんへの
プレゼントだよ。
しっかり受け取ってね
♡」

この状態では
避けることなどできない。
マナはただ悪臭精液を頭から
浴びることしかできなかった。



くさいー!くさいー!くさいー!くさいー!!
何これ!?最悪!!いや!
どろどろして振り払えない!

首を絞められ、悪臭精液を浴びせられるマナ。
二重の責めに彼女が気を失うのに
そう時間はかからなかった

「マナちゃん!マナちゃん!
どう?これすごいでしょ!
気持ちよかった...?」

「あれ?」

「マナちゃん?.....」

「この娘また寝てるよ。
本当しかたないなあ」

どろどろ
ぷんぷん

どろどろ

ハア
ハア
ぷん
ぷん

マナは巨大な怪人の腕の中で目が覚めた。

「マナちゃん、おはよう。そいつは僕のペット！
元は人間だったんだよ。」

「そんなのどうでもいいから、離してえ……」

「つれないなあ……。ちよつとだけ僕はここから離れるから
その間だけでも、そいつと遊んであげてよ。
マナちゃんのことにも気に入ってるみたいだし！」

「え!! いや! いやよ!
こんなやつなんかと!」

巨大な怪人はマナを締め付け始めた

「がはうっ！いだい！痛い！痛い！
離してえー！！」

「マナちゃん……
そいつだって元は人間だったんだよ。
傷つくようなこと言っちゃダメ。
仲良くするんだよ！じゃあね！！」

キキキキキキ
ギギギギギギ
ギギギギギギ

「ま……！まってええ！
はあ、はあ……
まってええ……」



恐怖心が体中に伝わる前に化け物は
マナの顔に触手を覆いかぶせてきた。
マナは何が起きたのか分からず思考が停止する。

（なに!?何が起きたの?）

ん!?真っ暗...!?

!!.....くさ!くさい!

なんなの!このひどいにおい!!うう.....)

ん!
んー
んぐん
んー

ジタバタ

ジタバタ

元人間であるこの怪人は人間のオスと
同じチンカスの臭いを体内に有している。
この怪人は当然風呂など入ることもないから
臭いは通常のオスのそれとは比べ物にならない悪臭である。

悪臭を吸い込まないように息を止めて
小さな抵抗をするマナ。顔は涙とヨダレにまみれている。

何かできることはないかと考えてはみるが
臭さと息苦しきのせいですぐに思考が停止してしまう。

（も、もうだめえ……。こんなところで
こんなやつにやられるなんて……。もう限界い！）

マナがあきらめてしていると
触手の動きが少しゆるんできた。

（ん……。？
力が少しゆるんでる？）

もわくもわく



「ん！むぐう！んんー！」

触手の力がゆるんだと
思っで少し安心したのが間違いだった。
マナは体を反転されて気づけば
怪人に唇を奪われてしまっていた。

ふう
ふにゅ
ご

くちゅ
く
くちゅ♡

（ふううー！最悪！キスなんてまだ誰ともしたことないのに！
こんなやつと……）

舌のような触手をマナの小さな口へ容赦なく
侵入させてくる怪人。よほどマナの口が気に入ったのだろう

服に侵入していた触手がマナの乳首を
激しくいじくり始めた。
マナは乳首を責められただけで
思った以上に感じてしまっていた。
悪臭もしくは怪人の唾液の効果なのかもしれない。

ふう
ふにふに
ぐちゅ
ぐちゅ

「んうん……ん！
ん！ん……ううん……んうー！うううん！
（こんなやつので感じちゃダメー！）」

そうは思っているでも
体の方はどんどん高揚していくのであった。



マナは気持ちの昂りを抑え、気を失いそうになるのをぎりぎりのところで耐えていた。

ふう
ふにふに

くちゅ♡

くちゅ♡

くちゅ♡

ぐり
ぐり
ぐり

（こいつ…乳首と舌をめっちゃめっちゃにしてくる…
もうこれ以上さらされたら意識とんじやう…）

とびそような意識の中、怪人の舌の動きが変わった…



怪人はマナの喉の奥に触手を押し込んできた！
呼吸がままならなくなつたマナ。
必死で空気を求めると悪臭が口の中に充満していく。

へっへっへっ

おえんぐんぐん
んぐんぐん

ぐりぐり
ぐりぐり

（おえっ！ぐるしいい……息ができない！
こいつの触手と唾液のせいで
うまく空気が取り込めないい……）



マナの吐息と怪人の悪臭が合わさってマナの鼻から漏れだした。
マナは、しつこく喉の奥を撫でまわされ続け気を失いかけている。
怪人には理性がないのでやることに容赦がない……

くさい……くるしい……
いつになったら、おわるの……
もう意識がたもてないよう……おえー！

もわ～

おえんぐんぐん
んぐんぐん

ぐりぐり

その数秒後、マナは気を失った。

「んんん…んん？」

「あ！目が覚めた！ごめんね、マナちゃん
ペットが暴走したみたいで。」

マナは手足を抑えられて地上からかなり
離れたところまで持ち上げられていた。
乳首には先ほどの感覚がいまだに残っていた。

「うう…私生きてるの…？」



「え!? ななな... 何あれ?
まさか... 男の人の...!」

「あれ? マナちゃん男の人のって何?
マナちゃんは清純だから、これのことなんて知らないよね...?」

「だから僕が、これのことを今から
じっくりと教えてあげる」

「うう... 今度は何をする気なの!?
もうやめええ... うう! くさ!」

● ●
それから放たれる強烈な
悪臭が風につれてマナの
鼻に届いた。

ふん

悪臭触手ちんぽがマナめがけて擦り寄ってきた。
あまりの悪臭に目がくらむ。

「マナちゃん、まずはこれの臭いからお勉強しようね。
しつかり臭いを嗅いでね。」

「ぐうぐう何なの！これ！擦りつけないで！

男の人のって、こんなに臭いの??

だめ！このにおいは吸い込んだらだめ！」

「マナちゃん！せっかく用意したんだから
ちゃんと嗅いでよ!!温厚な僕でも怒るよ！」

マナは吸わないようにと
必死に抵抗するが
ほとんど意味をなさない。

もわん
びーん

「マナちゃん、次は精液の臭いを嗅いでみて。さつきの精液とは比べ物にならないから！こっちは本体から直だからね！ほかほかだよ！とりあえずこれで反省してよ！」

ズくん！

ズリ
ズリ

ズリ

ズリ

ズくん！

ズくん！

（ん？何の音？触手もびくびくしてる？
くうう！そんなに強く擦りつけてこないで！！服に臭いがついちゃう）

触手の鼓動が激しくなる。これから何が起こるのか理解できないマナ。怪人の言うとおり、マナはこのでの知識がほとんどない。

マナの顔めがけて触手ちんぽから
大量の精液がぶちまけられた。

「え……!?!んんんうん!!」

「うわあー!これは僕でも引くね……
すごい量だね。どんだけ溜めてたんだよ。
マナちゃん、しっかりね!
今度は、しっかり味わってよね。」

「いや!いや!離してえー!

くさいの顔にがつでるう……ぼおえ
ぐさすぎで死んじゃうう!!」

「マナちゃん！大丈夫？
ちよつと飲んじやつたかな？」

「……いやあ……臭いのいやあ……やだあ……
誰でもいいから助けて……」

「よかった！まだ元気そうだね。
まだまだ遊ぶよー！」

マナは口に入った精液を出すのに
精一杯で怪人の言葉は
耳に届いていなかった

ぐっ

「んんんんんん…
え？縛られてる？
うえ！きつたないい！」

ダラ

マナは上半身を拘束された状態で目が覚めた。
顔の周りを汚れと臭いのひどい触手に囲まれていた。

「マナちゃん、君はほんとによく寝る娘だね！
起きるまで待ってたから、こいつら我慢汁ダラダラだよ。」



「もう我慢の時間は終わりだよ。
お前ら、マナちゃんと遊んでいいよ。」

その声を合図に一本の触手がマナの口に侵入してきた。
マナは抵抗したが思った以上に触手の力が強すぎて
数秒ももたなかった。

ズボ

「ん！ん！ん！ん！！」

口の中を味わうように触手がうごめく。
他の触手も我慢ができない様子だ。



我先にと他の触手たちもマナの小さな口に侵入していった。三本の触手ちんぽがマナの口の中で大暴れする。

「ちよつとまつて！もう入らないいいい！もうこないで！おえー！ぐるじいいいい！」

触手が暴れるたびにチンカス・汚れ・我慢汁がマナの唾液とミックスされる。まともに呼吸ができない。

「マナちゃん、クイズだよ！実は、その中に新入り怪人のおちんちんが一本あるんだけどさ、当てられたら休ませてあげる！！分かるかなあ？」



「おい！お前から早すぎだろ！マナちゃんが答える前に
絶頂してんじやないよ！まあ、マナちゃんのお口気持ちいいから
しかたないけどさあ……」

（またこれえなのお!?もういいかげんにしてえ……）

「あ……マナちゃん口ふさがってるから
クイズ、答えられなかったね！ごめんね……」



触手は満足した様子でマナの口から離れていった。マナは口に溜まった精液をなるべく早く吐き出すために舌をだらーんとのばしている。口で受け止めきれなかった精液は鼻からあふれた。

（おええ……最悪かなり飲んじやった。吐きそう……なんなのこのネバネバしたの……喉に絡まって少ししか外に吐き出せない。）

「ありがとう！マナちゃん気持ちよかったよ。またお願いね。またペットに交代するね!!」

（え……？今なんて……？）



怪人のペットが再び現れた。
素早い動きでマナの両手を口に入れる。

「またあんななの！こんなことばかり
繰り返して何が目的なの？もういいかげんにしてよ！」

「マナちゃんどうしたの？お腹すいたの？
そいえばここにきてから
何も食べてないもんね…
あ！そうだ！ちよつと待っててね。」

こいつには話が通じない。
改めて認識すると同時に
今から何をされるのか…。
マナは嫌な予感しかしなかった。

怪人の気配が消えたような気がした。
怪人のペットは待ってましたと言わんばかりに
マナの乳首をいじくり始める。
さっきの責めよりもテクニクが増している。

「ああ……いやあ……なんで乳首ばかり……。
くりくりしないでえ……。
だめえ、感じたら……こんなやつのでえ……。」

「お待たせ！ マナちゃん！

おやあ、二人でお楽しみ中だったかな。
気にせず続けてね。もう少しだけ時間がかかるから。」

マナの顔が青ざめる。先ほどマナが聞いたのは
大量の精液が天井から流れてくる音だった。

ドポ

ムワ

「ちよつと！これとめて！何のつもり！？
ううっ！臭い！！」

「どうぞ、おいしいミルクだよ。
マナちゃんたくさん栄養とってね。」

「こんなのがミルクなわけないでしょ！
馬鹿じゃないの！！」

精液はついにマナの顔を覆ってしまった。
乳首を責め続けられているせいで
開けたくないのに口がゆるんで開いてしまう。

「マナちゃん好きだから
飲んでいいからね。」

イッ アッ

（んんんう！飲みたくない。
おええぶ！乳首責めるのやめでえ！
感じてえ…ん！口が開いじゃうのおお！
ぶくぶく…おえ！ダメもう…。
精液風呂いやあああ。
流れてぐるのとめでえ！
くさいいいいくるじいらい）

ド
ン
ド
ン

ド
ン
ド
ン

ク
レ
ク
レ

マナが気絶する寸前、精液風呂の液体が少し引いて呼吸ができるようになった。だが、それは新たな責めの始まりであった。

（やっと、まともに呼吸ができると思ったのに……
まだ息苦しい……。しかも何このひどい臭いは……。何が起こったの？）

先ほどまで精液が顔を覆っていたせいでマナはまともに目が開けられない。精液風呂の臭いが先ほどよりも濃くなっていたこともマナの思考を遅らせている原因だろう。

「マナちゃん危なかったね。」

「食べすぎはよくないからね！ いったん停止したよ！」

マナはゆっくりと目を開ける。
すると目の前にはペット怪人の尻があった。
鼻の少し先には肛門が見える。

「マナちゃん、ちよつとお願ひしたいことがあるんだけど……。そいつの尻の穴を少しだけでいいから舐めてくれないかな？ そしたら、こいつすごく喜ぶと思うんだ！」

「んんんぐ！」

「え？ お尻？ 目の前にお尻があるの？」
「なんでこんなやつなんか舐めないといけないの！
絶対いや！」



マナが文句を言った次の瞬間。
ペット怪人の尻からものすごい
勢いで屁が放たれた。
マナは苦しみのあまりペット怪人の肌
に爪をつきたてる

「んんんんー!!」

んぐっぐう!んん!んんー!!」

キーン

キーン

ボウ

「あー怒っちゃったよ……ほんとにちよつとだけでいいから
舐めてあげてよ。そしたらご褒美に今度こそ休ませてあげるから!
これ以上そいつを怒らせない方が身のためだよ!」

「おええおえぶ！おえ！げええ！
舐め…舐めるからあ！もうやめでえ！
お願いしますうう…。」

「えらいね！マナちゃん！
そいつも満足したら解放してくるはずだよ。
頑張って！」

マナの舌の先端がアナルにふれる。
ほんとに少しふれたただけだが
嫌悪感があふれるように押し寄せてくる。

「うえ！おええ！げえええええ！ううううう
これでいいでしょ!?舐めたよう！
休ませてよお…こんなのもう無理の…」



ぼろぼろ

ぽんぽん

ボク

「えらい！マナちゃん、感動したよ。じゃあ約束どおりこいつにはご退場してもらい……あ……あ……」

「んぶうんんん!!んんん!
んんん!んんん!(この嘘つきら)」

「ん?何か言ってる?
マナちゃんにアナル舐めてもらって
こいつも気持ちよかったんだね……」

ギョ

ギョ

先ほどの放屁とは比べ物に
ならないほどの勢いと悪臭だ。
ペット怪人は体内に溜まっていた
ほとんどのガスを放出したようだ。

ぽん

へうへうへうへうへうへう
えぐう。ぐざいいい
さっきのより何倍もぐざいい
早くうう！早くこいつのお尻どけてえ！
顔から遠ざけてえ！！

「お疲れ様、マナちゃん！
じゃあ、ちよつと休憩したら
また僕と遊ぼ！
マナちゃんとの約束破ったから
こいつにはお仕置きしておくね。」

怪人の戯れは
まだまだ続きそうだった。



「休ませてくれるっていったじゃない!!
おろして!おろしてよ!!」

マナは体ごと触手に持ち上げられていた。
マナの頭の先では精液風呂が強烈な臭いを放ち続けていた。

「えー!さっきペットをどかせてから少しだけ
休んだじゃない。五分じゃ足りなかつた?
僕はもつとマナちゃんと遊びたいんだよお!!」

もわ

かーん
もわ

（うー！鼻が曲がりそう。。。）

なんだかこの空間の臭いがどんどん

濃くなってきたる気がする。。。

臭いを嗅いでるだけで気を失いそう。。。

もわ

かーん
もわ

「お！マナちゃんどうしたの？もしかして
クラクラしてきたんじゃない？

この精液風呂は空気に触れると

どんどん臭いがきつくなるんだよ。

だから時間がたてばたつほど濃く臭くなっていくなんだ。」

「そ…そんな！これ以上臭くなるっっていうの？
やだ！いや！もう、ここから出してよ！」

「そんなに焦んなくてもしっっかり
味わってもらおうよ。
さつきよりも栄養たっぷりだよお」

怪人がそういうと
触手がじっくり、ゆっくりとマナを
精液風呂へと近づけていった。



「いやあ！おろさないでっ！
いやあああああああ！」

マナの髪が精液風呂に浸ったところで
触手の動きが止まった。

（え？止まった？助けてくれるの？）

「マナちゃん、まずは臭いをしっかり嗅いでね。
いい臭いでしょ？」

「やめでえ！もう降ろさないで！上にあげてえ！

（うう……はあはあ……ああ……ひどいにおい……

鼻にまわりついてはなれない……）」



マナは何とか触手を振りほどこうと足をばたつかせるが力の差がありすぎて、ぴくりとも動かさない。抵抗むなしく、頭から悪臭の満ちた精液風呂に無理やり入浴させられてしまう。

「んんんう！うううう！！

んんんう！

（えっ！ぐげえ！鼻から入ってきてくるう

いや！ぐさいよお！息ができないいいいいい）」

「マナちゃん、

しっかり味わってね♡」

ジッパバ

ミッパバ

ん！ん！ん！ん！

ざざざ

「もう限界……はやく上げてえ……
息が続かないよう……」

しかし、触手の力がゆるまることはない。
マナの限界は近づきつつあった。

「マナちゃん、ぜんぜん飲んでないでしょ？
ほんとにしかたない娘なんだから。
ちよつと手伝ってあげるよ。」

マナには怪人の、その声は届いていなかった。
当然、何をされるのかも分かっていない。



精液風呂から現れた触手がマナの
アナルに侵入してきた！
不意をつかれたマナは口にためていた
空気をすべてはきだしてしまった。
おまけに口に入ってきた精液でむせてしまった。

「ごぼっごぼおぼおお！ぼええ
ごぼごぼええ！おええ！んぶぶんん！
（なに!?だめ今ので空気が!!
もう無理！本当にだめえ！
はやくもう限界だから！
はやくだすげでえええ……）」

「よしよし！マナちゃん味はどう？
ここにある精液は元人間の怪人から
集めたんだよ。オスのにおいがプンプンするでしょ？」

スポ♡

ゴッポッポッ
ゴッポッ



ようやく精液風呂から持ち上げられたマナ。だらしなく舌を出し、どうにか空気を確保する。回の中は濃厚な精液で泡立っていた。鼻の穴からたまっていた精液があふれてきた。

「おえ！げえええええ！
はあ……はあ……げえ！げほっ！！おえ！
どおじて誰もだすけにきてくれないのお？
くさいじい、ぐるじいのに……早くだれかきてよお。」

「お！マナちゃんいっぱい味わったみたいだね。ちよつと休んだら次の遊びにいいこうね〜」



「……う、ううう。ん？
ここどこ？何も見えない。」

「マナちゃん気分はどう？
今、体力回復用の触手をマナちゃんに
かぶせてるけど食べようとしている
わけじゃないから心配しないでね。」

マナは上半身ごと持ち上げられ
つま先が浮いている状態だ。
マナの体はあらゆる機能が急激に
回復しつつあった。
だが、そこには怪人のある思惑が
あることをマナはまだ知らない。

体の感覚がだんだん戻ってきた。

「ゆっくり休んでねえ、マナちゃん！」

ちゅいん

ちゅいん

（体がさつきより楽になってる……？）

どういうつもりなの？

こいつ、どうして私を回復させてるの？

ううっくっさー！さつきのと似たような臭い……？）

ちゅいん



体力が回復してくるにつれて
視界もぼんやりと見えるようになってきた。

「うえっ!!何これ?ん?」

くさい!!さつきまで

ここまでの

臭いじゃ

なかったのに」

もわ

ちゅびん

「体力を回復させたおかげでマナちゃんの嗅覚も
この洞窟に来た時と同じ状態になったんだよ。」

（うう……クラクラする。くさすぎい……）

「今までの遊びでマナちゃんの鼻

くさい臭いに慣れちゃってたんだよ……。それじゃおもしろくないよね。

でもこれで安心。常に新しい気持ちで臭いを感じられるよ!」

「それじゃ、マナちゃんの体力も回復したことだし次いこ！マナちゃんも楽しんでね。」

「これはダメえ！」

人間が嗅いでいい臭いじゃない……！！」

マナはぐったりしていた。

呼吸をするたびに

触手ちんぽの精液・チンカスの臭いが

入り混じった酸素を吸うことになる。

怪人の言葉もほとんど耳に届いていないようだった。



「それじゃそれをはずすね。」

マナの上半身を丸呑みしていた触手が天井に向かって引っ込んでいく。それにともなつて触手の中で溜まっていた精液がマナの顔をすべて飲み込んでしまった。精液は悪臭が増し変色していた。

ぐお
っお

「んんうんん!!ごぼっごぼっ!

ぶくぶくぶく!んんんんー!!んんー!!

（うううー!くさいー!はやくはやくー!）

「マナちゃん、いつまでそんな
ふくれっ面でいるつもりだい？」

（こんな悪臭、一秒だって嗅ぎたくない!!
せめて顔にかかった液体が少しでも落ちてくれないと……）

ポタ

ポタ

ポタ

「だめだよ！マナちゃん、これから遊ぶって言ったでしょ！
さっさといくよ！僕もう我慢できないよ！」

マナの胸元に二本の触手が近づいてきた。

マナはそれどころではなく、それに気づいていなかったが……。



「マナちゃんのパイパイ見ーせて！おおおおおお！
今日まで生きてて良かったああ……。」

「え!! あああああ!!

何してんの!! このヘンタイ!!

エロおやじ!!

「恥ずかしがってる

マナちゃんもかわいいねえ。

綺麗なピンク色だ。僕これを

見ているだけでイってしまいそうだよ……。」

マナは恥ずかしさのあまり、必死に閉じていた口を

おもわず開いてしまった。思いつきり悪臭を吸ってしまった。

マナにとっては誰かにおっぱいを見られることが

かなりの精神的ダメージとなってしまうようだ。

ポロ♡

ぐい

ぐい

「うう!!くっさ!鼻がおかしくなりそう。
目が開けられない。」

「マナちゃんのお臭覚が

正常な状態で

こいつの臭いを

嗅いでもらいたかったんだ。

たぶん、この洞窟の中で

ナンバーワンの

悪臭触手ちんぽだよ。

こいつは怪人になる前、

人間の頃から好んで

自分を悪臭で染めていたからね。

それで周囲が嫌がるのを見て

楽しんでたみたい。」

これまでの触手ちんぽとは

臭さの格が違った。

少しでも空気を吸おうとすると

涙が出そうになる。



（うう……くさいなんてものじゃない。
なんなのこれ?どうしてこんな
強烈な臭いになるのお……）

「やめでええええええ！近づけないで！！
だめ！おかしくなうおかしくなうからあ！
これ離してよ！」

「うーん。それじゃ、こいつの
チンカスを舌で少しでも
舐めることができたなら
離してあげる。」

「そんなの無理い！こんな
汚くて臭いものなんて舐めれる
わけないでしょ！」

「それじゃ、僕はマナちゃんが悶えている姿を
ずっと眺めることにするよ。」

「へうう……こんな長時間嗅いでられない！！
分かったわよ。やればいいんでしょ！！」

「お！すごいね！マナちゃん。
あ！ちなみにチンカスって
いうのは、その溝に
溜まってる黄色い汚れみたい
なやつのことだからね！」



マナは少しでも嫌悪感を感じないようにしようと目をつむって、それから意を決して触手ちんぽの最も汚い部分を舐めた。勢いがあまって包皮の内側までがつつり舌を入れてしまった。

「おお！マナちゃん！

思いっきりいくねー！」

「ううおえ!!えぐ!げえ!!

(さいあく...舌に汚いかたまりがいくつも

まとわりついてくる...絶対これ舌に臭いが残るう...やだあ。)

「それじゃあ...マナちゃん頑張ったから、そいつ離してあげる！」



怪人が合図を出そうとする前に
悪臭触手ちんぽがマナの口に侵入する。
まだ掃除してくれと言わんばかりに
マナの口の中でチンカスを
擦り付けながら暴れ出す。

「おげえええ！おええええっ！！
（早くだすげでええええ！）
口の中だめ、悪臭でぐちやぐちやにされちゃうううう」

「そいつ、マナちゃんのお口が
かなり気に入ったみたいだね。
人間の頃は女の子と触れ合う機会がなかつたみたいだから
さぞ、嬉しかったんだらうねえ。」



「う……んん……んん！
私、また気を失ったの……？
う！痛っ！」

「やっつと起きたね。マナちゃん。
それじゃ、これからマナちゃんにも
気持ちよくなってもらおうからね。」

マナは再び空中に持ち上げられていた。
股を無理やり広げられた状態で……。
マナの眼下には巨大な触手ちんぽが
悪臭を放っていた。

「ちよつと！こないで！」

はなれてよ！気持ち悪い！（うう、イカ？みたいな臭いが…）

だめえ…くさいいよう…頭クラクラする」

「マナちゃんのお股ふにふにだね。それじゃマナちゃんの大事なところに突撃ー！！」

もわ

ふに

ふに

「え？何？ちよつと、擦り付けてくるなあ！
においがうつつちやううう…」

グイ

グイ

触手ちんぽはマナの秘部に侵入しようとしたが
すべって失敗してしまった。

ズル

「ありや失敗。次はちちゃんと入っていけよー!!」

「ちよつと……まさか私の大事なところにこれを入
れようとしてるの?こんな大きいの入らない!
ダメでしょ!!やめさせて!!」

マナの秘部に入った触手は勢いよく進んでいく。
マナの来ていた服は破れ、お腹や秘部があらわになった。

「いっただいああああ！ぐううう！
抜いでええええ！動がざないでええええ……
だ……めええ……」

しかし、容赦なく触手ちんぽは
マナの中でうごめき続ける。

自分のチンカスをマナの体内に
擦り付けてマーキングをしているようだ。

「あ！やっぱりマナちゃん

初めてだったんだね！よかったあ……

マナちゃんは僕の中では清純アイドルだからね。
安心して！もう少ししたら気持ちよくなるから！」

ボコ
ズキ

「いだい！ぐるしい！うごつくくな！って言うってんでしょ！！
うごくなあ！！はあああああ！あん！はあああああ……。」

「おお！マナちゃん声がエロくなってきたよー！

だんだん気持ちよくなつて

きてるねえ？」

ズッ

「はあ！はああ……はあ……

ぎもちよくなつてないらしいぎらー！」

ズッ

マナの中で痛みと快感が激しく混りあっていた。
本人はその感情を表に出さないようにしているが……。

「触手の動きが荒々しくなってきたね。

マナちゃんすごいのがくるよお！

しっかりね！」

触手ちんぽから大量の精液がマナに送り込まれる。
マナの中でおさえきれなかった精液があふれだしてくる。

「ちよつとどんだけ出してんの!?
マナちゃんこれ絶対孕んじゃうよ。
この量は、さすがのマナちゃんでも
受け止めきれないよ!!」

（うううぐるしいいい!!
お腹どうなってるのお!
触手ちんぽの悪臭精液
流れ込んでぎでるう...
やだ...こんなやつので
妊娠したくないいいいい!
誰かとめてえー!!）

触手ちんぽがマナからゆっくりと離れていく。
溜まっていた精液がいつきにあふれてきた。
マナの体力はもう限界だ。息をするのがやっとである。

「マナちゃんお疲れ様。
ああ……これ大丈夫かな……？」

（あああ……やだあ
お家に帰りたい……
もうひどいことしないでえ
ええぐ……ええぐ……）

ド
バ
ア

ド
ン

ハ
ア
ハ
ア
ハ
ア
ハ
ア

マナが目を覚ますと精液風呂にほぼ裸で浸かっている状況だった。ものすごい悪臭だ。

マナは朦朧とする意識の中で少しずつではあるが何が起きたのか思いだしてきた。

「うう……早く逃げないと……」

ブ。ブ。

しかし、体が動かない……。

左足には先ほどとは別の触手が吸いついている。それとは別に何か近づいてくる音がする……。

「もうやだ！やめて！
お願いだから・・・」

「おお！マナちゃん！起きたね！
まだまだ触手は元気みたいだよ」

「このヘンタイおやじ！
絶対にゆるさないから！」

「怒らないでよ・・・でも
そんなマナちゃんも僕、好きだよ」

抵抗むなしく近づいてきた触手が
マナの秘部に侵入していく。

ぞろぞろ



触手は二穴に挿入された後
前後に激しく動き出した!

「あ! ああん!
やめてって言うてるでしょ!」

「そんなこと言われても
そいつら性欲がすごすぎて
僕ではどうすることも……」

触手の動きが一瞬止まる。
今から何が起ころのか
理解しマナは恐怖した。



触手から精液がいつせいに
マナの体内に流れ込んでくる

「あああああああああ！
だめだめだめ！もういやあ！」

触手から送られてくる精液は
止まる気配がない……

「もういやなの……ゆるしてえ」

ゴボ
ゴボ
ドピュム



精液が流し込まれ続け
どれほど経過しただろう。
まだおさまらない……

「いづになっただら終わるのお……
おなか苦しいい……ううう」

「マナちゃん、そろそろじゃないかな？
僕も分からないけどね！」

ゴボ
ゴボ
ドピュ



流し込まれていた精液が
とうとうマナの口からあふれてきた。

ぐっ
んんん
おげ

「ううういやあ……
臭い……苦しい……」

すさまじい悪臭から逃れようにも
体は動かないし、あとからあとから
あふれてくる……。

ぐ
ぐ
ぐ



「みんな……わたし……
本当に……もうだめかも……」

激しい責めと悪臭によって
ついにマナは意識を失ってしまった。

この1時間後、マナは助けられたが
しばらく体から臭いがとれることは
なかったという。

おわり





























































































































































